The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平安時代の漢詩文における「猿声」「鹿鳴」の受容
Author(s)	于, 永梅
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2004, 38, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47893
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平安時代の漢詩文における「猿声」「鹿鳴」の受容

于　永梅

一、はじめに

晩霞影軽、漫埋出峡之猿叫　晩霞影軽し、漫りに峡を出づる猿叫を埋む
暁雨声冷、暗洗在林之鹿鳴　暁雨声冷し、暗かに林に在る鹿鳴を洗ふ
（高岳相如「初冬於長楽寺同賦落葉山中路詩序」『本朝文粋』巻十、318）

一朶蓮峰含雨暮、万株松樹帯風寒　一朶の蓮峰雨を含みて暮れ、万株の松樹風を帯びて寒し
鹿鳴猿叫孤雲惨、葉落泉飛片月残　鹿鳴き猿叫きて孤雲惨み、葉落ち泉飛びて片月残る
（具平親王「秋声多在山」『類題古詩』11）

右の漢詩文は、秋の情趣を詠むものである。(1) どちらも、秋の物悲しさを表現するに際し、猿の鳴き声と鹿の鳴き声が取り上げられている。

「猿声」と「鹿鳴」はいずれも古くから中国の詩文に見られる素材であり、特に詩の中に多く用いられた。「猿声」は、悲哀に満ちたものであり、特に長江流域の風土を背景に愁人遷客の悲哀を増すものであった。[2] 一方、「鹿鳴」は、『詩経』「小雅」の鹿鳴篇に由来し、君臣和楽の場の和やかな雰囲気を表すものである。[3] このように、中国にあっては、「猿声」と「鹿鳴」とは本来異なる心情を表す表現であった。例えば、唐の元稹の「何満子歌」に、「陰山鳴雁暁断レ行、巫峽哀猿夜呼レ伴。古者諸侯饗二外賓一、鹿鳴三奏陳二圭瓚一」（『全唐詩』巻四百二十一）とあるように、一首の中で「猿声」と「鹿鳴」が同時に詠まれる場合でも、それぞれの用法がそのまま踏まえられている。

しかし、冒頭の例のように、平安時代の日本においては、「猿声」と「鹿鳴」は、どちらも秋という季節と関連付けられ、物悲しい秋の悲哀の気持ちを呼び起こすものとして詠まれているのである。本稿では、従来の研究において、ほとんど言及されていない「猿声」と「鹿鳴」の持つ季節性を中心に、平安時代の漢詩文における「猿声」と「鹿鳴」の受容の様相を考察する。

二、「猿声」

二―Ⅰ　中国の漢詩文における「猿声」

まず、中国の漢詩文における「猿声」を整理してみる。

猿の鳴き声を詠む最も古いと思われる例は『楚辞』に見られる。「雷填填兮雨冥冥、猨啾啾兮狖夜鳴。[4] 風颯颯兮木蕭蕭、思二公子一兮徒離レ憂」（巻二「九歌　山鬼」）は、山の女神と人間の男性との恋物語を背景とする詩であり、猿の鳴き声は好きな人に会えない女神の悲しさを表現するものとして用いられている。三国時代になると、呉の陸機

の『毛詩草木虫魚疏』に猿声が見られる。「猱、獼猴也。楚人謂二之沐猴一、老者為二獑猢一。駿捷也。其鳴噭噭而悲」（『太平御覧』巻九百十、獣部、猱）と、「猿声」がはっきりと「悲」という語で表現されるように、その声調は哀切な響きを持つものとして捉えられていることが分かる。さらに、晋の干宝撰の『搜神記』では、「臨川東興、有二人入レ山、得二猿子一、便将レ帰。猿母自レ後遂、至レ家。此人縛二猿子於庭中樹上一、以示レ之。其母便搏レ頰向レ人、欲二哀乞一、直是口不二能言一耳。此人既不二能放一。竟撃二殺之一。猿母悲喚、自擲而死。此人破レ腸視レ之、皆断裂矣」と、子猿が殺されたことを悲しむ母猿は、腸がずたずたに切れてしまうとされている。(5) この故事が広く知られるようになって以降は、次第に「猿声」は堪えがたいほどつらく悲しい思いを表す表現として固定化し、「猿声」の悲しさが「断腸」で表現されるようになる。

六朝時代までの「猿声」詩を整理すると、次の表のようにまとめることができる。(6)

	全漢詩	全三国詩	全晋詩	全宋詩	斉詩	全梁詩	陳詩	北斉詩	北周詩	計
猿詩総数	2	6	7	11	2	30	9	2	10	79
猿声詩数	1	1	6	8	2	20	6	1	5	50
哀猿詩数	1	1	6	5	1	10	5	1	4	34
秋の猿声	0	0	1	1	0	3	2	0	1	8

（「猿詩」は猿を詠む詩、「猿声詩」は「猿詩」のうち猿の鳴き声を詠む詩、「哀猿詩」は「猿声詩」のうち猿の声を哀しいと詠む詩、「秋の猿声」は秋に鳴くとされる詩を指す）

右の表が示しているように、猿詩全体七十九首のうち、猿声詩は五十首もあり、六割以上を占めている。また、猿声詩のうち、その声が「悲・哀」などの表現によって、哀しいものとして捉えられる哀猿詩は三十四首あり、猿

声詩の六割以上を占めている。この表から、六朝時代に「猿声」詩は猿を詠む詩の中心となり、さらに「猿声」は悲哀のイメージを持つ詩語として定着したことが分かる。(7) 加えて、猿声詩が南北朝の南朝に集中し、長江流域を活動の中心とする南朝の詩人に愛用されたことも、この表から読み取ることができる。「詩語としての猿声は、本来、季節を問わず用いられてよいわけであるが、旅人の孤独や寂寥を表す季節として秋がとりわけふさわしいところから、実際には秋とのかかわりでうたわれる例がもっとも多い」という指摘もあるが、(8) 猿声詩数全五十例のうち、秋に鳴くとされる詩は八例しかなく、殊更に多いとは言えない。

唐代に入っても、「猿声」は六朝時代に引き続き、悲哀のイメージを持つ詩語として詠み継がれていく。一方、「旅雁忽叫レ月、断猿寒啼レ秋」(孟郊「雑曲歌辞　車遥遥」『全唐詩』巻三十五)や、「猿啼秋風夜、雁飛明月天」(劉希夷「巫山懐古」『全唐詩』巻八十二)のように、猿と雁とを対比し、猿は秋に鳴くものとする詩が見え始める。しかし、このような例は全体から見ると少なく、「巴人夜唱竹枝後、腸断暁猿声漸稀」(顧況「雑曲歌辞　竹枝」『全唐詩』巻二十八)のように、特定の季節との結び付きを認めにくい例がほとんどである。

以上見たように、六朝時代と同じく、唐代でも「猿声」にはそれほど強い季節感はなかった。言い換えれば、「猿声」は秋の景物として一般化するまでに至らなかったのである。

二―II　平安時代の漢詩文における「猿声」

「猿声」は、日本の漢詩人にも愛好され、広く詠まれている。次に、平安時代の漢詩文における「猿声」の具体的な詠まれ方を追ってみる。

「猿声」の用例は、早く『懐風藻』に二例が見える。「雲岸寒猨嘯、霧浦栢声悲。…葉落山逾静、風涼琴益微」（中臣大島「山斎」13）では、「寒猨嘯」は「栢声悲」と対になって詠まれ、木の葉が落ちる季節の物悲しさを描写している。「山中猿吟断、葉裏蟬音寒。贈別無二言語一、愁情幾万端」（藤原総前「秋日於長王宅宴新羅客」86）では、新羅の客との離別の悲しさを表すために「猿声」が用いられている。この二例は、中国の「猿声」の使用例と同じく悲しさを表すものである。『懐風藻』では、二例ともに猿の鳴く季節は秋とされるが、用例は少なく、一般化した用法であったかは判断できない。

勅撰三集の「猿声」を見てみると、「傍レ峰近聴樵客唱、入レ澗深聞断猿声」（藤原令緒「早春途中」『経国集』巻十一、雑詠一、137）では、猿の鳴く季節は春であり、「畏景西山没、清猿北嶼呼」（嵯峨天皇「夏日臨泛大湖」『文華秀麗集』巻上、遊覧、8）では夏、「聴裏清猿啼二古木一、望前寒雁雑二涼飈一」（嵯峨天皇「秋日入深山」『凌雲集』9）では秋、とあるように、猿の鳴く季節は様々であり、特定の季節との関連づけは見られない。

しかし、平安時代中期には、勅撰三集時代の様相を残しつつも、秋の風物である雁と対になる例が増え、秋のイメージと強く結びつくようになる。

①意驚由過雁　意の驚くことは過ぎゆく雁に由る
腸断豈聞猨　腸の断つことは豈猨を聞かめや
（「寄白菊四十韻」『菅家文草』巻四、269）

②臨水館連江雁翼　臨水の館に江雁の翼は連なり
枕山楼入峡猿声　枕山の楼に峡猿の声は入る
（橘直幹「秋宿駅館屏風」『新撰朗詠集』下、雑、424）

③三叫寒猿傾耳聴　　三叫の寒猿耳を傾けて聴く
一行斜雁払頭過　　一行の斜雁頭を払ひて過ぐ　　（具平親王「過秋山」『本朝麗藻』巻下、山水部、55）

④巫陽有月猿三叫　　巫陽に月有りて猿三叫
商嶺無雲雁一行　　商嶺に雲無くして雁一行　　（源孝道「晩秋遊弥勒寺上方」同右、仏事部、69）

右の平安時代中期の用例は、詩題からも分かるように秋を背景としている。冒頭で挙げた二例も同時期の詩文であり、「猿声」は雁と同様に秋の景物として捉えられている。平安時代中期には、「猿声」は秋の景物であるというイメージがすでにある程度出来上がっていたと考えられる。

平安時代後期になると、「猿声」を秋の景物とする例はさらに増え、特に代表的詩集である『本朝無題詩』では、「巴陽猿叫雲収後、彭蠡雁嘶霧巻間」（藤原敦光「八月十五夜翫月」巻三、月前、140）、「遣レ懐巴峡猿三叫、送レ眼衡山雁一行」（藤原明衡「暮秋即事」巻五、秋、302）など、猿は雁と対になる例が多く、「猿声」を詠む詩の中で、秋の景物として詠む例が全二十例のうち十六例を占めるようになる。平安時代後期には、「猿声」の秋のイメージがさらに広まり、一般化していたことを窺い知ることができる。(9)

以上見てきたように、平安時代の漢詩文における「猿声」は、悲しさを表す点では中国の「猿声」と同じである。一方、「猿声」の詠まれる季節については、中国では、唐代に雁と対になり、秋のイメージの強い用例が増えたものの、一般化はされなかった。これに対して、日本では、平安時代中期以後、雁との対比表現が多く見られ、猿と秋との結びつきが強くなってゆき、後期には、「猿声」は物悲しい秋の景物として定着したのである。

三、「鹿鳴」

「鹿鳴」の最も早い例は、『詩経』「小雅」の鹿鳴篇に見られる。鹿鳴篇は、君臣和楽の饗宴の場を詠うものであり、「呦呦鹿鳴、食二野之苹一、我有二嘉賓一、鼓レ瑟吹レ笙。…呦呦鹿鳴、食二野之蒿一、我有二嘉賓一、德音孔昭。…呦呦鹿鳴、食二野之芩一、我有二嘉賓一、鼓レ瑟鼓レ琴」とある。「呦呦」とは、多くの鹿が鳴く声である。鹿が呦呦と鳴いて、仲間を呼び合い、野に集まって共に草を食(は)むように、自分には嘉賓の訪れがあり、そこで、瑟を鼓し笙を吹かせて、精一杯のもてなしをするという主旨のことを述べている。ここでは、鹿が鳴いて呼ぶ対象は仲間である。同様に『楚辞』の「同音者相和兮、同類者相似。飛鳥號二其群一兮、鹿鳴求二其友一」（巻十三、七諫第十三、謬諫）にも、鹿が鳴くのは、友を求めるためであるとはっきりと述べられている。

「鹿鳴」は、後世に広く詠み継がれていくが、その多くは『詩経』の鹿鳴篇に由来するものであり、鹿鳴篇の影響を強く受けている。馬駿氏は注3論文で、「鹿鳴」は群臣嘉宴の宴席で詠まれるのがほとんどであり、君臣という縦の関係を主旨とするのが主流であるが、一方、蘇武が李陵との別れに際して贈った詩「鹿鳴思二野草一、可三以喩二嘉賓一。我有二一樽酒一、欲三以贈二遠人一。願子留斟酌、叙二此平生親一」（『文選』巻二十九）に詠まれている「鹿鳴」のように、鹿鳴篇の縦の関係と異なり、友人という横の関係を表すものもあると指摘されている。このような別れに際しての宴は「別宴」とされ、この詩は宴会という場を共有する点において従来の「鹿鳴」詩と一致するものの、その宴は終始別離の耐え難い空気に包まれるので『詩経』の和やかな「歓宴」と異なるものだと論じられている。

馬駿氏は、「歓宴」と「別宴」という中国における「鹿鳴」の詠み方は『懐風藻』にも踏襲されると述べられてい

る。長屋王が新羅の客を宴会に招くという場で詠まれる「嘉レ賓韻二小雅一、設レ席嘉二大同一。鑑レ流開二筆海一、攀レ桂登二談叢一。盃酒皆有レ月、歌声共逐レ風。何事二専対士一、幸用二李陵弓一」（背奈行文「秋日於長王宅宴新羅客〈賦得風字〉」60）は、友好平和の雰囲気の中で嘉賓を喜び迎える「歓宴」であり、「玉燭調二秋序一、金風扇二月幃一。新知未幾日、送別何依依。山際愁雲断、人前楽緒稀。相顧鳴鹿爵、相送使人帰」（刀利宣令「秋日於長王宅宴新羅客〈賦得稀字〉」63）は、宴席の賑わいと喜びがない「別宴」であるとされている。

『懐風藻』のこの二例は、長屋王を君主、新羅の客を臣下になぞらえており、『詩経』の鹿鳴篇と同じく縦の関係を示している。平安時代の漢詩文に詠まれる「鹿鳴」の用例は少ないが、『詩経』鹿鳴篇を踏まえ、君臣という縦の関係を表すのが主流である。例えば、『性霊集』に「鹿鳴」が詠まれる詩がある。「鶴響聞レ天馴二御苑一、鵠翅且戢幾将レ飛。遊魚戯レ藻数呑レ鉤、鹿鳴二深草一露霑レ衣」（「秋日観神泉苑」巻一、2）、この詩は神泉苑に放たれた動物を描写することにより、天皇の恩徳を頌えているものである。(10)

また、『本朝文粋』にも「爰洛水春遊、昔日閣（さしおき）レ筆。商飆秋宴、今時巻レ筵。鹿鳴再停、人心不レ楽」（大江朝綱「停二九日宴一十月行詔」巻二、詔、46）、「伏惟、皇帝陛下、天経在レ憶、人徳帰レ厚。追二凱風一而悲声未レ息、望二諱月一而憂色更深。上春鹿鳴、惣不レ欲レ聴。聖衷之至、凡情何堪」（菅原文時「請二正月元日七日節会依レ旧不レ停、十六日踏歌依レ詔停止、十七日射礼改レ月被レ行事」巻四、論奏、96）の二例が見られる。巻二の例は、醍醐天皇の崩御をきっかけに二十年以上も廃止されていた九月九日の菊の宴を、この十月に復活させようとするものである。巻四の例も宮廷行事の宴会と関わり、どちらも宴会を「鹿鳴」と表現していることから、この二例はともに『詩経』を踏まえていると考えられる。

平安時代後期の『本朝無題詩』には、右の例と少し異なる用法が見られ、「城南勝趣与レ他殊、詩句数篇酒一壺。霧底鹿鳴山近繞、波頭月泛氷平鋪」（惟宗孝言「暮秋城南別業即事」巻六、別業、401）がそれである。この詩は藤原師成の城南の別荘で行った詩会の時に詠まれたものである。[11] この中の「詩句数篇酒一壺」という句からも推測できるが、同じ詩会で大江佐国が詠んだ402番の詩に「五十餘年歓宴席、無レ如二今日快遊遨一」と、「宴席」という語がはっきりと詠まれているところから、この時は宴会も開かれていたことが分かる。この詩は、君臣という縦の関係を示しているのではないが、宴会を楽しむという点においては『詩経』と同じである。また、蘇武の詩のように離別の場面ではないが、友人という横の関係を示しているのである。つまり、この詩は中国の「鹿鳴」の二つの詠み方を融合し、新しい表現をとっていると言える。

以上のように、平安時代の漢詩文における「鹿鳴」の詠まれ方は独自に発展した例もあるが、大きくは詩経を踏まえていると考えられる。しかし、先に挙げた「鹿鳴」の用例において傍点を付したように、その多くが秋を背景としていることには注意が必要であろう。

一方、『新撰万葉集』には、これまで見た例と全く発想が異なる例がある。

85秋風に綻びぬらし藤袴つづりさせとてきりぎりす鳴く

86商飆颯颯葉軽軽、壁蚕流音数処鳴　　商飆颯颯として葉は軽軽たり、壁蚕の流音は数処に鳴く

暁露鹿鳴花始発、百般攀折一枝情　　暁露に鹿鳴花始めて発く、百般攀ぢ折る一枝の情　（巻上、秋歌）

86番の詩に詠まれているのは、鹿の鳴き声ではなく「鹿鳴花」のことである。『和名類聚抄』（元和本）巻二十「草

木部」の「鹿鳴草」条に、「爾雅集注云、萩一名簫〈…新撰万葉集等用芽字…楊氏漢語抄又用鹿鳴草三字…〉」とあるように、「鹿鳴花」とは萩のことである。また『和漢朗詠集』「秋」の「萩」部に収められているこの詩の後半二句について、『国会図書館本和漢朗詠注』では、「萩ノ名ヲバ、鹿鳴草ト云フ也。鹿ノ鳴ク比ロ、始テ発ク花ナル故也」と注している。(12) 萩は鹿の鳴く頃に咲くので「鹿鳴草」と呼ぶという説明から、鹿の鳴く季節は萩の咲く秋と捉えられていることが分かる。この詩に詠まれる「鹿鳴」は、『詩経』の鹿鳴篇とまったく関係がないと思われる。

では、詩の中で、なぜ「鹿鳴」は秋の萩と結びつくようになったのだろうか。鹿と萩と言えば、すぐに思い浮かぶのは和歌である。和歌の中で、鳴く鹿は古くから歌表現の対象として注目され、しかも、その鳴く季節は秋であり、秋の萩と結びつくことはよく知られている。(13) このような歌は、早く『万葉集』に多く見られ、題詞を「鹿鳴」あるいは「鳴鹿」とする歌だけでも、二十一首もある。(14) さらに、「萩」が詠み込まれる歌はそのうち十一首もあり、半分以上を占めている。例えば、巻十「詠鹿鳴」という題詞を持つ一連の歌（2141～2156番）がある。

さ雄鹿の妻ととのふと鳴く声の至らむ極みなびけ萩原　（巻十、秋の雑歌、2142番）
君に恋ひうらぶれ居れば敷の野の秋萩しのぎさ雄鹿鳴くも　（同右、2143番）
なぞ鹿のわび鳴きすなるけだしくも秋野の萩や繁く散るらむ　（同右、2154番）
秋萩の咲きたる野辺のさ雄鹿は散らまく惜しみ鳴き行くものを　（同右、2155番）

これらの歌では、牡鹿は秋に妻恋のために鳴いている。大浦誠士氏が、『万葉集』に「鹿は秋の景物としての固定化がみられ、…鹿と萩との取り合わせは、萩を鹿の妻とする発想としても類型化され、「妻呼ぶ」鹿として恋情を掻き

立てる相聞の歌ことばである」と説明されている[15]ように、万葉集では、「鹿鳴」は一般的に秋の景物として捉えられており、また、萩は鹿の妻であるという発想まで定着したのである。『万葉集』では、題詞にある「鹿鳴」という言葉そのものは『詩経』によったものだと考えられるが、『万葉集』の鹿は、妻を恋しく思って鳴くものであり、中国の詩文にあるような友を呼ぶ鹿とは根本的に異なっている。歌の内容も、縦或いは横の関係を表す宴会の場に詠まれるという主旨とは異なって、秋という季節に、妻恋のために鳴くという日本独特の詠み方となっている。この点については、すでに馬駿氏が前掲論文で、「「鹿鳴」＝妻恋という発想は中国にはないらしい。これは上代日本人が独自に持つに至ったもので、その生成は自然界への観察や農耕生活の体験によっておのずから導かれたものだと見て然るべきだろう」と指摘されている。このような「鹿鳴」は、後の和歌に大きな影響を与え、和歌における「鹿鳴」のイメージの主流となった。平安時代に入っても、こうした傾向は変わらない。

しかし、平安時代では、『古今和歌集』の「奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき」（巻四、秋歌上、215番、読人不知）のように、鹿の鳴く声によって秋を悲しく感じるという万葉時代にはなかった要素が新たに見られるようになる。[16] 秋の悲しさに関しては、鈴木日出男氏が、悲秋は中国詩の常套的な発想であり、その発想は唐風謳歌時代の勅撰三集に多く詠み込まれ、さらに『古今和歌集』でも、秋とは悲しい季節であるという感覚が固定化したのだとされている。[17] 従って、『古今和歌集』215番の歌のように、「鹿鳴」の詠まれる季節は悲しい秋であるため、その悲しい季節に聞く「鹿鳴」も悲しいものだと理解できる。鹿の悲しい響きによって秋の情緒も一層増すものとなるのである。

泉紀子氏もこの86番の詩について、表現自体は非常に和歌的であると論じられている[18]ように、この「鹿鳴」は『詩

経』を踏まえたものではなく、万葉時代の妻恋の「鹿鳴」を漢詩に導入し、さらに平安時代の和歌に定着した悲秋の観念も取り入れ、それらを和歌の漢訳である漢詩に融合させたものである。

『新撰万葉集』には「鹿鳴」を詠んだ詩が他に四首見られ、いずれも86番と同じ詠み方をしていると思われる。

113奥山に黄葉踏み分け鳴く鹿の声聴く時ぞ秋は悲しき

114秋山寂寂葉零零、麋鹿鳴音数処聆　　秋山は寂寂として葉は零零たり、麋鹿の鳴く音数処に聆ゆ

勝地尋来遊宴処、無朋無酒意猶冷　　勝地に尋ね来たりて遊宴する処、朋無く酒無くして意猶ほ冷し

（巻上、秋歌）

127秋はぎの花開きにけり高さごの尾のへにいまや鹿の鳴くらむ

128三秋有蕊号芽花、麝子鳴時此草奢　　三秋蕊有り芽の花と号す、麝子鳴く時此の草奢れり

雨後紅匂千度染、風前金色自然多　　雨後の紅匂千度染む、風前の金色自然に多し

（同右）

355風さむみ鳴く松虫の涙こそ草葉の上に露を置くらめ

356班班風寒虫涙澂、灼灼草葉落色嬾　　班班たる風寒く虫涙澂り、灼灼たる草葉落色嬾し

処処芽野鹿声聆、林林叢裏虫声繁　　処処芽の野に鹿声聆え、林林叢の裏虫声繁し

（巻下、秋歌）

546うちしくに物を思ふか女郎花世を秋風の心うければ

547打乱緒秋風収倦、世緒女郎貌絶饒　　打ち乱れたる緒秋の風収まりて倦む、世緒の女郎の貌絶饒なり

芽野鳴鹿幾恋愛、林枝□鳥且耽饒　　芽の野に鳴く鹿幾か恋愛し、林の枝に□鳥且た耽饒なり（同右、女郎歌）

右に挙げた四首も、いずれも傍点を付したように詩の背景は物悲しい秋であり、萩と結びつく傾向が強い。114番の詩には「遊宴」という言葉があるので、『詩経』の「鹿鳴」が念頭にあるとは思われるが、「無朋無酒」とあるように、詩全体から見ると、それと対になる和歌と同じく秋の物悲しさを強調していると思われる。547番にある「恋愛」という言葉からも、『新撰万葉集』に詠まれている「鹿鳴」は、万葉時代の「鹿鳴」に、悲秋の観念が加わったものだと考えられる。

以上をまとめると、平安時代の漢詩文においては、『新撰万葉集』以外の用例は、『詩経』の鹿鳴篇を踏まえていると考えられる。詩全体では、悲しいイメージは強くないが、和歌の影響を受けたためか、秋を背景とする詩が多い。一方、『新撰万葉集』にある「鹿鳴」を詠んだ詩は、和歌の漢訳であるため、和歌の影響を強く受け、「鹿鳴」は物悲しい秋に妻を呼ぶためのものとして捉えられるようになったのである。つまり、平安時代では、「鹿鳴」の詠まれる漢詩文には、秋という季節が強く感じられる。冒頭で挙げた「鹿鳴」の詠まれる二例も、こうしたことを背景に出来上がったものだと考えられる。

四、おわりに

平安時代の文学に取り入れられ、次第に定着していった悲秋の観念は、平安時代の漢詩文に受容される「猿声」と「鹿鳴」にも影響を与えている。「猿声」と「鹿鳴」は、ともに動物の鳴き声であるという共通点があるものの、中国においては本来それぞれ異なるイメージを持つものであり、特定の季節感を持つものではなかった。しかし、平安時代の漢詩文においては、秋の景物として捉えられ、冒頭で挙げた作品にあるように、物悲しい秋に聞く悲し

い鳴き声となっていく。その背景には、中国文学にある悲秋の観念が導入され、平安時代に固定化していったということがあると考えられる。このような「猿声」と「鹿鳴」の持つ季節感に対する考察は、中国の詩文を受容する際に独自の表現を生み出した平安時代の漢詩文の方法の一端を明らかにするものとなろう。

注

(1) 相如の詩序の題には「初冬」とあるが、その内容を見ると、晩秋の景物が中心的に描かれているため、ここではこの例を秋に準ずるものとして捉えることにする。

(2) 松浦友久「「猿声」考」(『詩語の諸相――唐詩ノート――』研文出版、一九八一年)、「「猿の声」と「鹿の声」」(『『万葉集』という名の双関語――日中詩学ノート――』大修館書店、一九九五年)

(3) 馬駿「漢籍との比較から見た「鹿鳴」の歌――その巻頭性と表現性を中心に――」(『北海道大学国語国文研究』第一〇五号、一九九七年)

(4) 『集韻』では、「蝯、説文、善援、愚屬、或作猨・猿」と記され、「猨」と「猿」は同類とされるので、本稿では、「猨」を「猿」として扱う。

(5) 劉宋・劉義慶撰『世説新語』「黜免第二十八」にも類話がある。

(6) 全漢・全三国・全晋・全宋・斉・陳・北斉・北周詩は松浦崇編各索引(櫂歌書房、福岡大学中国文学会)による。全梁詩は森野繁夫校閲・佐藤利行等編『全梁詩索引』(白帝社、二〇〇〇年)による。

(7) 注2で挙げた松浦氏の「「猿声」考」においても同様の指摘がされている。

(8) 松浦友久「秋の猿」(『中国文学歳時記　秋下』黒川洋一ほか編集、阿辻哲次ほか執筆、同朋舎出版、一九八九年)

(9) 平安時代において、猿と雁との対比が常識的であったことについては、小島憲之氏の「「訓み」の一、二について」(『国風暗黒時代の文学　補篇』塙書房、二〇〇二年)でも触れられている。

(10) 小西甚一「空海の詩文」(『国語と国文学』第五十巻十号、一九七三年)、渡邊照宏・宮坂宥勝校注『性霊集』(『日

本古典文学大系』、岩波書店、一九六五年）

（11）佐藤道生「大江佐国、花を愛し蝶となること――佐国伝の考察――」（『平安後期日本漢文学の研究』笠間書院、二〇〇三年、初出『国語と国文学』第六十八巻、第十一号、一九九一年）

（12）伊藤正義・黒田彰編著『和漢朗詠集古注釈集成』第二巻上（大学堂書店、一九九四年）

（13）小池一行（久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、一九九九年）、片桐洋一（『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院、一九九九年）、田中喜美春（秋山虔編『王朝語辞典』東京大学出版会、二〇〇〇年）などの指摘がある。

（14）巻八「秋の雑歌」1550・1602・1603、巻九「雑歌」1761・1762、巻十「秋の雑歌」2141～2156

（15）『万葉ことば事典』大和書房、二〇〇一年

（16）片桐洋一『歌枕歌ことば辞典　増訂版』（笠間書院、一九九九年）

（17）『古代和歌史論』第二篇第三章「悲愁の詩歌――漢詩と和歌」（東京大学出版会、一九九〇年）

（18）泉紀子「新撰万葉集の「和」と「漢」――暁露鹿鳴花始発――」（『大阪女子大学百舌鳥国文』第六号、一九八六年）

引用テキスト

『楚辞集注』上海古籍出版社／『搜神記』台北世界書局／『毛詩正義』（『十三経注疏附校勘記』所収）中文出版社／『文選』『全唐詩』中華書局／『太平御覧』台湾商務印書館／『懐風藻』『文華秀麗集』『性霊集』『菅家文草』日本古典文学大系、岩波書店／『凌雲集』『経国集』（小島憲之『国風暗黒時代の文学』所収）塙書房／『新撰万葉集』（『新編国歌大観』所収）角川書店／『本朝麗藻簡注』本朝麗藻を読む会、勉誠社／『類題古詩本文と索引』本間洋一、新典社／『万葉集』『古今和歌集』『本朝文粋』新日本古典文学大系、岩波書店／『新撰朗詠集　校本と総索引』川村晃生・佐藤道生、三弥井書店／『本朝無題詩全注釈』本間洋一、新典社

（大学院後期課程学生）

论 文 提 要

平安时代汉诗文中“猿声”“鹿鸣”的接受

于 永梅

“猿声”与“鹿鸣”自古以来就是中国文学中的重要题材。“猿声”多用来表达长江流域愁人迁客的悲哀情绪，“鹿鸣”则来源于《诗经·小雅·鹿鸣》，多用来烘托君臣筵宴场面的和睦气氛。“猿声”与“鹿鸣”除了都是描写动物鸣叫的词语之外，并没有其他的类似之处。而在日本的平安时代，二者却都多出现于描写秋天景物的诗文中，并都带有悲哀的意义。本文将围绕这一特征，来考察“猿声”与“鹿鸣”在平安时代汉诗文中是如何被接受的。

在平安时代汉诗文中，“猿声”一词的使用频率很高。在作为表达悲哀之情的用法上与中国的“猿声”相同。但是，在中国“猿声”并没有被作为某一特定季节的景物来描写，而在平安时代“猿声”却逐渐与秋天有了密切的联系，最终成为一种典型的秋景之一。与“猿声”相比，平安时代汉诗文中“鹿鸣”的用例却不多，除一部分源自《诗经》外，还有一部分与《诗经》无关。与《诗经》无关的“鹿鸣”，几乎都出现在《新撰万叶集》的诗中，而且受到《万叶集》和歌中雄鹿在秋天悲切呼唤妻子的观念的影响，也都带有悲哀的情调。这样一来，在平安时代汉诗文中，“猿声”与“鹿鸣”都逐渐成为秋天景物的象征，并都带有了悲哀的意义。

通过对“猿声”与“鹿鸣”这两个词的考察，可以了解到平安时代汉诗文在接受中国诗文的表现时，既吸取了中国固有的用法，又具有其独特的一面。

关键词 ：平安时代汉诗文、猿声、鹿鸣、悲秋